

ワーズワースとディヴィッド・ハートレーの哲学(下)

前川, 俊一

<https://doi.org/10.15017/2332843>

出版情報 : 文學研究. 58, pp.149-175, 1959-07-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

ワーズワースとデイヴィッド・ハートレーの哲学(下)

前川俊一

ワーズワースがハートレーの心理学説から得來つてゐるものとして諸家のひとしく羨びるものは観念聯合の法則であらう。いかにも、ワーズワース自身の筆になる「抒情詩集」第二版の序文や「序曲」の所々に、「一見観念聯合の法則を適用してゐるかと思はれる叙述や説明が見出される。ここにその最も顕著な一例として「序曲」第一卷六〇九——六四〇行を取上げて考へて見よう。作者は幼時、野球で烈しい肉体の運動を伴ふいゝろんな遊戯に夢中になつてゐたことを述べたあとで、次のやうに語る。

... often in those fits of vulgar joy

Which, through all seasons, on a child's pursuits
Are prompt attendants, 'mid that giddy bliss
Which, like a tempest, works along the blood
And is forgotten; even then I felt
Gleams like the flashing of a shield: the earth

And common face of Nature spake to me
Rememberable things; sometimes, 'tis true,
By chance collisions and quaint accidents
Like those ill-sorted unions, work suppos'd
Of evil-minded fairies, yet not vain
Nor profitless, if haply they impress'd
Collateral objects and appearances,
Albeit lifeless then, and doom'd to sleep
Until maturer seasons call'd them forth
To impregnate and to elevate the mind.
—And if the vulgar joy by its own weight
Wearied itself out of the memory,
The scenes which were a witness of that joy
Remained, in their substantial lineaments
Depicted on the brain, and to the eye
Were visible, a daily sight; and thus

By the impressive discipline of fear,
By pleasure and repeated happiness,
So frequently repeated, and by force
Of obscure feelings representative
Of joys that were forgotten, these same scenes,
So beauteous and majestic in themselves,
Though yet the day was distant, did at length
Become habitually dear, and all
Their hues and forms were by invisible links
Allied to the affections.

(四季を通じて子供の所行にともなひがちの、あの荒々しい喜び、血管を嵐のやうにかけめぐり、やがては忘れられてしまふ、あの目くらむばかりの幸福感の只中でさへ、私はよく、楯の閃めきのやうな輝きを感じた。大地と自然のあたりまへの顔が、心にとどめ置くべきことを私に語りかけるのであつた。成程それは、偶然の出会いと奇妙な出来事を通じて語ることもあつた(心悪しき精霊共のしわざと思はれてゐる、あの不釣合の結合のやうに)。しかしそれとでも、それらの偶然事がそれにともなふ事物やものゝ姿を心に刻みつけ、またかくして刻みつけられたものが、そのときは生氣を缺いて、眠つてゐても、時が熟すれば呼び出されて、心を豊かにし、昂めるやうになるならば、偶然事も無

駄に終らず、また無益でもなかつたことになる。——そして先きの荒々しい喜びは、それ自体の重みによつて圧せられて、記憶から消え去つたとしても、その喜びの目撃者であつた光景は、その本質的な形相を脳裡に刻まれて残り、日毎の眺めとして、眼にうつるのであつた。かうして、恐怖の感銘的な修練により、喜びと幸福のしほくの繰返しにより、また忘れられた喜びを代表する隠微の感情の力によつて、それ自体が実に美はしく壮嚴であるこれらの光景は、まだ遠い先きの日のことながら、遂には常住に親しいものとなり、その色、形の一切は、見えない連鎖によつて、愛情に結びつけられることになつた)。

アーサー・ビーティ―はこの箇所を評して、「これは、感情が作り出されるたちのものであるといふ点でも、また恐怖とか快樂とか云つた特定の感情を名指して、聯想作用や感情の姿質作用を支配する主な力であると述べてゐる点から云つても、純然たる観念聯合説である。」と主張する。また R・D・ヘイヴンズ教授もこのくだりを説明して、「かういふスポーツと結びついた自然の事物や自然現象は、それまでは彼に対して殆んど意味を持たなかつたが、彼の記憶のうちに印せられ、そしてまた楽しい経験と結合させられるために、時と共に、ハートレーの原理によつて愛せられるやうになつたのである。」^④と

言つてゐる。たしかにこの箇所では、ワーズワースは多少とも観念聯合説らしいものを己れの経験に適用してゐる。しかしそれが果してピーティの言ふやうな「純然たる観念聯合説」であるかどうかは吟味を要するところであらう。

この問題を考へるにあつて、有力な手がかりになるものが、ハートレーの著書「人間觀察論」の中に見出される。彼はこの中で、自然の光景が人間の心の中に呼びおこす快感には、聯想が多大の關係を持つてゐることを説いて、次のやうに言ふ。

「自然界の美の觀照から生れる快楽は次の分析をゆるすものゝやうである。

果実や花の味の良さや香氣や美しい色、小鳥のしらべ、頃合ひの季節の快い暖かさや涼しさは、それらの快楽の雛型を田舎の風景に移行させるが、それらはすぐとお互ひに入り交りあひ、またこれから列挙する快楽の雛型と交り合つて発現するので、それを一々區別立てするのは不可能である。

「その風景の一部に、絶壁とか、滝とか、雪をいたゞく山々などあつた場合、そこに生れる畏怖や恐怖の観念は他の一切の観念を拡大し、活氣づけ、また苦痛から免れてゐることを暗示することによつて、次第に快楽に交つて行く。

「全様にして、ある光景の壮大さ、ある光景の新奇さは、驚異と感嘆を引起すことによつて、言ひかへれば苦痛の域に迫り、あるひははいり込む程の大きな変化を、前後の心の間に引起すことによつて、快楽を非常に昂めるであらう。……

「多くのスポーツや遊戯は田舎に特有のものであつて、その観念やそれに伴ふ快楽は、田舎の光景を眺めるとき、うつろひ易い状態で、かつ互ひに交りあひ、個々に弁別することの不可能な状態で再現させられるのであるが、これらも自然の美の暗示する快楽を更に増大させる。

「以上の事柄につけ加へていゝことは、人口稠密の都市の不快感、危険や汚辱と、田舎の風景を實際に見るか心に描くかした場合に感じる健康さ、静けさ、純潔さとの対照である。更には田舎の静かなすまひにしばし、最も完全に見出される社交と敏談の楽しみであり、田舎の風景と多大の關係のある恋の喜びであり、またこの場合、他の場合と全様、他人の意見や讚美が人の心中に伝染して生み出すところの喜びである。かゝる伝染性は、肉体の場合と全様、精神上の事柄にも見出されるのである。」^⑤

この説明の中で注意を惹くものは、「田舎に特有の」スポーツや遊戯にともなふ快楽が、田舎の風景を眺めると

きに再現することを説いたくだけりである。ヘイヴンズ教授はこれで以て、ワーズワースの語るスポーツと自然との關係を説明し得るものと考へてゐるらしい。また、先きの「序曲」からの引用箇所を精読するとき、廿七行目に 'joys that were forgotten' とあるのは一行目から五行目にかけての 'vulgar joy ... giddy bliss Which ... is forgotten' とあるのと一貫した意味を持ち、随つてそのやうな解釈を一応はゆるすであらう。しかし他方ではワーズワースは、このやうな「荒々しい喜び」が「それ自体の重みによつて圧せられて、記憶から消え去る」ことを強調し、自然の印象とスポーツの喜びとの結び付きを説くにはむしろ控へ目なことを見落すべきであるまい。彼にとつては、幼時のこのやうな喜びは、それが自然の光景に移行させられたが故に貴重なのでなくて、自然の「心にとゞめ置くべき」印象をしかと脳裡に焼きつける機縁となつたが故に貴重なのである。これは、そのすぐ後に「偶然の出会いと奇妙な出来事」を持出して來てゐることからも明らかである。「偶然の出会いと奇妙な出来事」とは、例へば「序曲」第十一卷二七九—三一六行に述べてゐる経験のやうなものを指すのであらう。彼がまだ六才にならぬ頃、祖父母の家から、下僕を案内にして、馬に乗つて附近の丘に出掛けたことがあつた。途中彼は下僕にはぐれ、ひとり馬をひいて荒野をさまよふ

間に、かつて人殺しが処刑された盆地にはいりこんでしまつた。彼は恐怖に驅られて、その盆地を駆け上るが、その直後、彼は丘の上に燃えるかぶり火と、丘の下にひろがる沼と、強風に行き悩む少女の姿を見て、自然の「想像的な荒涼の趣き」に強烈な感銘を受けたと語つてゐる。このやうな場合、彼の経験した想像的な自然の印象と、それを経験する機縁になつた出来事とは本質的には殆んど何のかゝはりもない。その意味でこれらは妖精共のいたづらのやうな「不釣合ひの結合」である。これが

... Nature by extrinsic passion first

Peopled my mind with beauteous forms or grand.
の意味するところであらう。この場合の 'extrinsic' は、「本質的には(自然の美と)かゝはりのない、偶然的な」の意味であらう。Arthur Beatty はこの箇所の 'extrinsic passion' を 'factitious passion' と解し、ハートレーの説を援用しながら「かくして熱情もしくは感情は觀念即ち知性に対しては副次的なものである。またそれは本源的なものでなくて 'factitious' (作為的)なもの、即ち觀念聯合によつて生み出されるものである。」と説明してゐるのはハートレーの説にこだはり過ぎたための読み違へであらう。ワーズワースはこゝで、何等かの刺激のために、外界に対する彼の感受性が異常に敏感になつてゐるときに、よく神祕的、想像的な経験の訪れ

を受けるといふ、彼特有の心理的習慣の説明を試みるのであるが、その説明に観念聯合説を適用しながら、説明の重点が本来の観念聯合説を外れてしまつてゐるのである。このことは、この引用箇所に見られる「恐怖」「喜び」「幸福の繰返し」と云つた言葉の用ひ方の意味するところを検討すると更に明らかになつて来る。先づ二三行目に「恐怖の感銘的な修練」といふ句が出て来る。恐怖が観念聯合に果す役割については、ハートレーは先きの引用文中で、恐怖または畏怖をそゝる事物が自然の事物の間にあるとき、この観念が他の一切の観念を拡大し、活気づけ、しかも他方に於て、それを眺める人が苦痛から免れてゐることを暗示することによつて、次第に快樂に交つて行くと言つてゐる。ワーズワースも「序曲」の中で幼少時を語るにあつて、しばしば「恐怖の感情に觸れてゐるが、彼がその中に恐怖の果す役割として認めるところのものは、上述のハートレーの機械的、合理主義的な説明の範囲を超えた、微妙なものがあるやうに思はれる。それは時として、半ば迷信的な、原始的恐怖といふ形をとつた自然の教訓であることもあり、またアルズウォーター湖のボート無断漕出しの挿話に見られるやうに、更に進んで、「おぼろげでそれと定めがたい、未知の存在形態への知覚」に導くものでさへあつた。ワーズワースにとつてはそれは自然に對する畏敬と敬虔の念に

つらなるものであり、自然のうちに働く靈的な存在を感じ、心をたかめ、清めるよすがとなるものであつた。云ひかへれば、恐怖は自然の人間への靈的な働きかけの一樣式だつたのである。

また「喜びと幸福のしばし」の繰返し」といふ言葉にしても、これをすぐにハートレーの學説に結びつけて、観念聯合法則發動の一条件としての、「偶然的な感情」と自然の印象とを結びつける出来事の繰返しと解するのは恐らく誤りであらう。この言葉の適切な説明になるものは、例へば水仙を歌つた彼の詩の一節に見出される。

I gazed—and gazed—but little thought
What wealth the show to me had brought:
For oft, when on my couch I lie
In vacant or in pensive mood,
They flash upon that inward eye
Which is the bliss of solitude;
And then my heart with pleasure fills,
And dances with the daffodils.

(私は飽かず眺めつづけたが、この光景が如何なる富をもたらししたか、ついぞ気づかなかつた。ところが、私が臥所にねそべつて、ぼんやりしてゐる時、あるひは思ひに沈んでゐるとき、よくその水仙の大群が、孤独時の無上の喜びである、あの内心の眼に閃く。する

と私の心はうれしさにあふれ、水仙と共に躍るのだ。」

四月のある午後、水仙のおびただしい大群が池辺に躍りはたたく光景を目にして以来、その回想はしばしば彼の心眼に蘇り、そのたび毎に彼の心は「喜びに充ちて水仙と共に躍る」のであるが、この際、その喜びは決してその光景と無関係なもの、偶然的に結びついたものでなく、彼が当初池辺で見た光景とはじめから内面的に深く結びついた喜びなのである。そしてこの際繰返されるものは、喜びとその光景とを偶然的に結びつける出来事自体の繰返しではなくて、「落ち着いた気持のときに想ひおこされる感情」としての喜びのくりかへしである。この光景は彼特有の心理的習慣に従つて、非常な鮮明をだし、彼の脳裡に浮びあがるのを常とするが、その間に賢明な記憶の無意識的選択作用によつて「それ自体はあややかであつても、特徴的でない多くのも」^⑦を捨て去り、

… So feeling comes in aid

Of feeling, and diversity of strength
Attends us, if but once we have been strong.
(かくして感情は感情の援けにはせ参り、^⑧

力が私等に仕へてくれる。若し私等が一度強力でさへあつたならば。)

しかしこの特定の経験の結晶の核とも云ふべき喜びの感情は当初から存在してゐるのであり、次余のものはそのまはりに附着して成長をつづけるにすぎない。それはハートレーの場合のやうに、自然の光景のもつ魅力を、それに偶然的、附随的に結びついたあらゆる快楽を総動員して説明し去らうといふ、云はゞ遠心的な試みの対象とはなりがたい経験と云はねばならない。事実ワーズワースはハートレー流の觀念聯合説で、自然の魅力を説明することの不可能なことをよく知つてゐた。

Nor, sedulous as I have been to trace

How Nature by extrinsic passion first

Peopled my mind with beauteous forms or grand,

And made me love them, may I here forget

How other pleasures have been mine, and joys

Of subtler origin; how I have felt,

Not seldom, even in that tempestuous time,

Those hallow'd and pure motions of the sense

Which seen, in their simplicity, to own

An intellectual charm, that calm delight

Which, if I err not, surely must belong

To those first-born affinities that fit

Our new existence to existing things,
And, in our dawn of being, constitute
The bond of union betwixt life and joy.

Yes, I remember, when the changeful earth,
And twice five seasons on my mind had stamp'd
The faces of the moving year, even then,
A Child, I held unconscious intercourse
With the eternal Beauty, drinking in
A pure organic pleasure from the lines
Of curling mist, or from the level plain
Of waters colour'd by the steady clouds.

(私は自然が外来の熱情によつて、まづ私の心を美はしい、あるひは壮大な形象でみたし、それを愛するやうにしむけた跡を克明に追つて来たけれども、私にはそれ以外の快楽もあつたし、またそれよりもつと奥深い起源をもつ喜びもあつたことを云つて置きたい。

私はあの嵐のやうな(烈しい感情に支配されてゐた子供の)時分できへ、単純でありながら、知的な魅力を持つかに見える、あの神々しく清らかな感覚の動き、あの静かな喜びを、幾度か覚えたのである。この喜びは、私の考へにして誤なくんば、われわれの新しい存在を既存の事物に適合させ、われわれの生誕の曙にあつて、人生と喜びとの結合のえにしを形づくる、あ

の初産の親和性に属するものなのだ。さうだ。私は憶えてゐる。この変り行く大地と十年の歳月が、私の心に移り行く年の面を刻み終つたとき、丁度その時分に、私は小児にして、永遠の美と無意識の交はりといふのみ、巻き上る霧の線と、動かぬ雲の色をたへた渺々たる水面から、純粹な感能の喜びを飲みほしたのである。)

この中で 'in their simplicity, to own An intellectual charm' とあるあたり、ワーズワースは明らかにハートレーの心理学説を意識しながらものを言つてゐるかと思はれる。そして彼は、物心つかぬ小児にも自然の美が喜びをもたらす所以を、われわれの生誕のはじめに於ける、否、生誕以前に溯る(これについては後に触れる)、自己と自己をとりまく世界との親和性に歸してゐる点は、フロイトの説の萌芽をさへ感じさせるものがある。いづれにしても、ワーズワースは、ハートレー流の觀念聯合説で説明のむづかしい、そもぐのはじめから知的とさへ言へるやうな面を具へた静かな喜びを、すでに幼時に、自然から汲み取つてゐるのである。このやうに、純粹な原初の感覚的経験のうちに、われわれの心の奥底に語りかける意味深い内容が含蓄されてゐるといふ考へが、ハートレーの思想からワーズワースのそれをわかつ、決定的な特徴の一つであると思はれる。

こゝでわれ／＼はワーズワースとハートレーの間に見られる心理的経験の把握の仕方の差異について考へて見たい。心理現象を説明するに際して、ハートレーは脳の隨性極微物質の振動に対応する感覚から出発する。ところがこの「感覚」なるものは、すでにある程度具體的経験から抽象し、単純化された、分析的な概念である。一体われ／＼が外界から最初に受取る経験を、そのやうに単純なものとして規定し、それから、複雑な觀念を導き出して行かうといふ試みが心理發達の実際を説明するものとして適當なものかどうかは問題であらうが、兎も角このやうな行き方はジョン・ロック以来の英國經驗主義の伝統であることは先きに見た通りである。ところが、ワーズワースは、後で触れる通り、「序曲」の中で生れて間もない嬰兒の心理發達の経過を描くにあつて、これとはまったく違つた行き方を取つてゐる。また己れの心の成長の過程を語るにあつても、常にある具體的、個性的な経験を中心にしてゐる。しかも、そこで取上げるものは、普通の経験ではなくて、主に彼の所謂「時の諸点」に於て得られた異常の経験であり、彼に受取られた当初から、神秘的な、複雑な要素になつてゐるのである。それはまた、回想裡に、先きに説いたやうな過程を経て、次第にその内容を変へては行くが、最後まで、ある特定の時、所で得られた印象としての具體性、個性を

失はない。彼の後年に「呼び出されて、心を豊かにし、昂める」やうになる経験とは、そのやうな経験を指すのである。随つて、この種のものをして意味深い経験たらしめる特質は、ハートレーの感覚―單純觀念―複合觀念と云つた知識發展の秩序や、またこの秩序を追つて發展する過程に高級の精神内容が形成されて行くと云つた説明の仕方では捕へられない性質のものと云はねばならぬ。

ハートレーは、ロック以来の英國經驗主義の伝統を追つて、経験は元來外から來つたものであり、外界の事物がわれ／＼の心に刻みつける印象は人間のあらゆる知識の根底をなすものであると考へた。そしてこの意味に於て、またこの意味に於てのみ、感覺的経験を重んじた。

彼はこのやうな原始的感覺が單純觀念を生み、更には觀念聯合の法則によつていろいろな要素を導入し、次第に複雑な「複合觀念」を生み出す過程のうちに、倫理的にもより価値あるものが形づくられて行くことを認めてゐる。これはこのやうな人間心理發達の窮極的段階として神への愛 (Theopathy) や道德感の形成を説いてゐるところからも明らかである。彼は感覺的快樂と智的快樂の差を説くにあつても、次のやうに言明してゐる。

「感覺的快樂はわれ／＼の受け得る最初の快樂であつて、智的快樂の基礎をなすものであり、智的快樂は觀念

聯合の法則によつて次々に感覺的快樂からつくり出されるものである。……いづれに目をやつても、自然の順序で先きに来るものは後に来るものよりも常に不完全であり、重要性のうすいものである。……感覺的快樂は智的快樂の誕生に寄与するものであるが……それは智的快樂と全一の価値と威厳をもつものとは考へられない。」

この論はハートレーにあつては、快樂に限らず、他のあらゆる心理現象にもあてはまるものであらう。随つてハートレーに従へば、人間の經驗は、その原初の段階を離れれば離れる程、より高等で、より価値の高いものとなるわけである。従つて人間が外界から受取る感覺的經驗は、それが將來形成される高等な觀念や情操の基礎であり、材料であるといふ点を除いては、それ自体としては低級であり、価値の乏しいものであるといふ結論が出て来る。この点、ワッツワースの考へとハートレーのそれとの間には大きなへだたりがある。ワッツワースのとりあげる感覺的經驗は、その当初から「心にとゞめ置くべき」意味深い内容を語りかける。幼時のかゝる經驗は、後年彼が「しばしば」赴いて、それからあなたが泉に於ける如く飲みとる」所の貴重な經驗である。それは、そのやうな意味に於て、「彼の心の基礎を置くもの」であり、しばしば「回想のうちに彼の成人の心を訪れて、「心を豊か

にし、心を昂める」ものなのである。

ところがアーサー・ピーティエーはこの点についてのロックやハートレーとワッツワースの考へとの間の大きなへだたりを無視して、たとへば 'Exposition and Reply' や 'The Tables Turned' の中に述べられてゐる考へを、単に「經驗をして汝の知識の源泉たらしめよ」といふことを語るにすぎないと主張し、「たしかにこれらの言葉はロックの散文的な言明と全様に、「神祕的」なところも「遊戯的」なところも「主観的」なところもなく、ワッツワースの云ふところも、ロックの云ふところも、抽象的な理解に対立するものとしての眞実の知識を主張し、高等めいた「直観的」で「超越的」な心理操作に対立するものとしての心と想像力の直接で単純な心理操作を強調する点に於て全くその意図を一にするものである」と云つてゐる。しかし、このやうにピーティエー流に解して読むとき、この両詩が如何に索莫たる言葉と化するにか。

「十八世紀の背景」の著者バジル・ウィリー教授も、ピーティエーの説を受け入れて、ハートレーを「ワッツワースの精神的先駆者」とさへ呼んでゐるが、当らない見解のやうに思はれる。一体に、アーサー・ピーティエーはワッツワースを不当にハートレーに近づけて解し、ウィリー教授はハートレーをあまりにワッツワースに近づけて

解する。たとへば教授はハートレーの心理学説を解説するにあつて、しばしば「自然」といふ言葉を用ひ、それにウィッツワースの意味を帯びさせながら、それをハートレー自身のものゝやうに扱つてゐる。しかし、ウィッツワースの考へる自然とハートレーの考へる自然との間には大きなへだたりがある。また教授は、先きにも触れた、ハートレーが自然の光景が人の心に喜びを与へる所以を説明したくだりを解説して「我々が自然の美を喜ぶ気持は、花や果実の味ひや色、香氣、あたゝかさとして涼しさ、田舎のスポーツと遊戯の喜びと云つた原始的な要素が、都会の醜悪さ、危険、腐敗と對比された健康さ、静けさ、純潔さと云つたものと結合してつくり上げるものである。かくして心うつろなるとき、思ひに沈むとき、あるひは味気ない日常の生活にあつて、楯の閃めきのやうな輝きが来り、また「時の諸点」が回想されて、心が養はれ、しらす、の間に恢復させられるのである。」と云つてゐる。こゝに持出されてゐる「楯の閃めき」とか「時の諸点」の意味するものは、これまで検討して来た通り、当初から深い神祕的な内容を具へた、ハートレーの心理学説の視野にはいつて来ないたちの経験であつて、この点ウィリー教授はハートレーにはもとゝ無きものをウィッツワースから借り来つて、ハートレーの考へらしく述べてゐるといふ非難を免れ得ないであらう。

さて元の「序曲」の一節に戻つて「忘れられた喜びを代表する隠微の感情の力」の意味するところを検討して見よう。この句がそのまへの箇所にある「血管を嵐のやうに駆けめぐり、やがては忘れられてしまふ、あの目くらむばかりの幸福感」それ自体の重みによつて庄せられて、記憶から消え去つてしまふ」喜びと関連してゐることは、たやすく推測し得られる。そしてそれはハートレーが田舎のスポーツや遊戯と自然の光景との關係を論じたところで、「その觀念やそれに伴ふ快楽は、田舎の光景を眺めるとき、うつろひ易い状態で、かつ互ひに交り合ひ、個々に弁別することの不可能な状態で再現させられる」と述べてゐるくだりに適合する考へである。この点でウィッツワースがこの箇所を述べてゐることは、ハートレーの説にもつとも大きな近よりを見せてゐると云へるであらう。しかし、よくこの句を吟味して見ると、ウィッツワースはこゝで単にスポーツの忘れられたる喜びだけを云はうとしてゐるのでなく、もつと含みのある云ひ方をしてゐるやうに思はれる。「序曲」第二卷の三二一―三四一行で、ウィッツワースは少年時を回顧して、次のやうに語る。

I would walk alone,

In storm and tempest, or in starlight nights,
Beneath the quiet Heavens; and, at that time,

Have felt whatever there is of power in sound
 To breathe an elevated mood, by form
 Or image unprofaned; and I would stand,
 Beneath some rock, listening to sounds that are
 The ghostly language of the ancient earth,
 Or make their dim abode in distant winds.
 Thence did I drink the visionary power.
 I deem not profless these fleeting moods
 Of shadowy exultation: not for this,
 That they are kindred to our purer mind
 And intellectual life; but that the soul,
 Remembering how she felt, but what she felt
 Remembering not, retains an obscure sense
 Of possible sublimity, to which,
 With growing faculties she doth aspire,
 With faculties still growing, feeling still
 That whatsoever point they gain, they still
 Have something to pursue.

(私はよく、夕立に、嵐に、あるひは星月夜に静かな空の下をひとり歩いた。そしてそのやうな時、何にせよ、すがたかたちに汚されぬ物音のうちに、心を高揚させる力のあるのを感じた。そしてある岩陰に立つて、古ら大地のおぼろげな言葉である物音、あるひ

は遠くの風にそのさだかならぬすみかを置いてゐる物音を聞くのを常とした。それらのものから私は想像力を飲みほした。これらの影のやうな喜びの束の間の気分も私は無益ではなかつたと思つてゐる。それは、これらがより純粹な心や知的生活に縁があるからでなく、魂が何を感じたかを忘れながらも、どういふ風に感じたかを憶えてゐて、可能な崇高性をおぼろげに意識し、魂の機能が成長をつゞけると共にこの崇高性を追ひ求め、たとへ如何なるものを獲得しよう、依然として追求すべき対象のあることを感得するやうになつたからである。)

ここでワーズワースが「忘れられた喜び」としてのべてゐるものは、ハートレーの列挙してゐるやうな、明確な輪郭をもつた喜びでなくて「束の間の気分」の生み出した「影のやうな喜び」であるが、そのうちに崇高性への意識を生み出す素地を具へてゐるものであり、ワーズワースにとつてはこのやうな、正体のつかみがたいまゝに、将来成長して行く大きな可能性をもつた経験が、彼の詩心を養ふにもつとも大きな働きをしたのである。

ティンターン・アベイ・ラインズの中にも「忘れられた喜び」が表現を変へてあらはれる。

These beauteous forms,

Through a long absence, have not been to me

As is a landscape to a blind man's eye:

... I have owed to them,

In hours of weariness, sensations sweet,

Felt in the blood, and felt along the heart;

feeling too

Of unremembered pleasure: such perhaps,

As have no slight or trivial influence

On that best portion of a good man's life,

His little, nameless, unremembered, acts

Of kindness, and of love.

(これらの美はしい形象は、私にとつて長い間離れてはゐたものゝ、風景が盲人に對するやうな關係にあつたわけではない。疲れを覚えた時に、血管に感じ、心臓につたはり行くこゝろよい感覺は、これらの形象に負ふものである。それに、記憶してゐない快樂の感じも、それはたとへば良き人の生涯の最善の部分に些少ならぬ影響を及ぼす、彼の名もなき、覚えてゐない、親切と愛の行為のやうなものであるが。)

以上、「忘れられた喜びを代表する隱微の感情」を、何よりもまづウィヅワース自身の吐いてゐる意味深い言葉にてらして解釈するとき、それはハートレーの機械的な觀念聯合説とは可なりに異つた内容をもつものであることが判明して來るのである。

尚、「抒情詩集」第二版の序文中には左の一節がある。「眞想の習慣は私の感情を非常に刺激し、調節したもので、かういふ感情を強く引起すやうな事物の描写は自づから目的を伴ふやうになつたのだと思はれる。若しこの考へが誤つてをれば、私は詩人の名を冒す権利がないのである。といふのも、良き詩はすべて強力な感情が自然に充ちあふれたものであることにちがひはないが、如何なる題目をあつかふにせよ、何か価値のある詩は、人並すぐれた感受性をもつてゐながら、その上に、長く、深く考へた人によつて作られるからである。といふのは我々の感情の不断的輻輳は我々の思想によつて變へられ、導かれるによる。そしてこの我々の思想も実は我々のあらゆる過去の感情の代表的表現に外ならぬ。)

「忘れられた喜びを代表する隱微の感情」と云つた考へ方と、「あらゆる過去の感情の代表的表現である思想」と云つた考へ方との間には明らかにつながりがあると考へられる。此の場合、ウィヅワースは感情と思想との間に一種の次元的な關係を認めてゐる。感情の複合が思想を生み、その思想が逆に低次の感情、感覺を規制するといふ考へである、ハートレーも感覺と觀念、あるひは感情との間にさういふ次元的な關係を考へ、高次のものが低次のものを規制すると共に低次のものが高次のものを

規制すると論じてゐる。曰く……

「感覚が想像を生むとせよ。さすれば感覚と想像は相合して向上心を生み、感覚と想像と向上心は利己心を、感覚と想像と向上心と利己心は同情を、感覚と想像と向上心と利己心と同情は神への愛を、また感覚と想像と向上心と利己心と同情と神への愛は道徳感を生む。

そして、それと逆の過程をたどつて想像は感覚をつくり替へ、向上心は感覚と想像を、利己心は感覚と想像と向上心を作り替へ、……道徳感^⑩は感覚と想像と向上心と利己心と同情と神への愛をつくり替へる。そして遂にはこれら無数の相互的な影響の故に、熱情はたしかにその存在を認められても、分析の非常に困難な程度^⑪の複雑さに達するのである。」

かう云つた心理現象に於ける高次のそれと低次のそれとの相互作用を考へてゐる点に於て、ワーズワースがハートレーの考へに極めて近いことはよく了解される。しかしワーズワースがハートレーの考へに示唆を受けてかういふ考へを形づくるに至つたとしても、それは決してハートレーの考へをそのまま採入れてゐるのではない。ハートレーの場合、高次の感情と低次のそれとの間の相互影響關係はまつたく機械的、必然論的に考へられ、あるひは自然界に於ける化学的融合の現象になぞらへて考へられ、その間に個人の能動的な働きかけの入込む余地

のないやうになつてゐる。ところがワーズワースは上記の箇所で「深く、長く考へる」詩人の性質に言及し、かういふ常人と異つた詩人の能動的、積極的な心がまへにもとづく心理的習慣が、己れの到達した思想を逆に己れの感覚、感情にくまなく滲透させて、そこに思想と感情、感覚の緊密な有機的聯関を形づくる働きを説いてゐる。

しかしこれは或る程度常人にも努力すれば可能なことからである。詩人と常人との異なる点は質のそれであつて、量のそれであるとすれば、そこに自らハートレーとはちがつた考へが生れて来るわけである。

もつともアーサー・ビーティーは「ハートレーは人間を外界の印象を記録する単なる機械とは看做してゐない。極初期の最も単純な感覚の時分から、人間の魂の活動あるひは運動がある。」と云ひ、その理由として、心の働きがこれらの経験^⑫を快樂とか苦痛とか云つた適當な個人価値に変へて行くからであると云つてゐるが、これは首肯し難い。経験が個人的価値に変へられて行くこと自体は、心の自発性、能動性を保証するものとは云へないからである。ハートレーにあつては快樂も苦痛も、われわれが外界の事物から受ける感覚の一種にすぎず、随つてそれはわれわれが受動的に受取るものであるといふ結論に到らざるを得ないのである。尚ビーティーはハートレーが必ずしも常に機械的な説明を取らない例として、

ハートレーの「人間觀察論」の中の一節を引用しながら、「特殊の欲望」(即ち低次の欲望、例へば先きのハートレーよりの引用文中の向上心の利己心に対する如き——筆者)から「一般的欲望」(高次の欲望、例へば利己心の向上心に対する如き——筆者)の生れる過程を説明して、次のやうに云つてゐる。

... passion, or emotion, is secondary to ideas, that is, to intellect: and it is also not primary, but "factitious," that is, generated by association. In this way "particular desires" become "general desires"; and even if it is true that after general desires and endeavours are generated, they give rise to a variety of particular ones, "the original source is, in the particular ones, and the general ones new-alter and new-model the particular ones, so much as that there are not many traces and vestiges of their original mechanical nature and proportions remaining."⁽¹⁾

(熱情又は感情は觀念、即ち知性に対しては副次的なものである。それはまた原始のものでなく『作為された』もの、即ち觀念聯合によつて生まれたものである。かくして『特殊の欲望』は『一般的欲望』となる。また一般的欲望や努力が生れた後、それらがいろんな特殊の欲望の変化を引起すことは事実にしても『その元

来の源泉は特殊の欲望にあるのであつて、一般的欲望は特殊の欲望を新しく変化させ、新しく作りかへるために、元の機械的な性質や割合の痕跡は大して残存しないのである。』)

右の引用文中、(訳文では『』でかこまれた文章はハートレーの著書からの引用文なのであるが、このところを直接にハートレーの原文について見ると、ビィーの引用文に“new-alter”あるところは、ハートレーの原文では“never alter”となつてゐる。⁽²⁾ ビィーはこの一語を写し違へたがために、ハートレーの原文とは意味が全く逆になつてしまつてゐるのである。ハートレーの原文の意味するところは「たとへ一般的欲望が今度は逆に特殊の欲望に変化をもたらすやうなことになる」とも、その元来の源泉は特殊の欲望にあるのであつて、一般的欲望がさうひどく特殊の欲望を変化させ、作り替へるやうなことは決してなく、特殊の欲望が元來持つてゐた機械的性質や比例は多分に残存してゐるのである。」といふことになる。アーサー・ビィーはワーズワースとハートレーとの思想的なつながりを強調せんとするあまり、一方ではワーズワースをハートレーに近づけて解釈しようとする傾向があると共に、他方ではハートレーの学説をなるべく能動的、非機械的に解釈しようとする強引な努力が見受けられる。

以上、われ／＼はワージズワースの書をものゝ中で、徒
来ハートレーの心理学説の影響が特に顯著であると考へ
られて来た箇所について検討を加へ、これまで説かれて
来た影響は幾分はあるにしても、決して全面的な、深い
ものでないことをたしかめ得たと思ふ。ワージズワースに
は元々それから独自の思想を發展させるべき、深く豊か
な心理的経験があるのであつて、觀念聯合説に似たもの
をそれに適用するにしても、己れの独自の経験に適合す
るやう、ハートレーの説にとらはれず、自由な変改を加
へてゐるのである。したがつて、ワージズワースの思想と
ハートレーの學説の類似は案外に皮相のものにとゞまる。
ワージズワースをハートレーに近づけて解することは、か
へつてワージズワースの思想を淺薄化し、その持つ奥深い
意義をとらへそこなふ危険があるやうに思はれる。

英国經驗主義哲學では、よく嬰兒の心理が知識成立の
過程を考へる上に引合ひに出される。ところがワージズ
ワースの「序曲」の中には生れて間もない嬰兒の心理の發
達の過程を叙した一節がある。次にその箇所を検討して、
そこほどの程度にハートレーの心理学説、乃至は英國經
驗主義哲學との關聯性が見られるかを考へて見たい。
「序曲」第二卷二三七行以下の條である。

Bless'd the infant Babe,

(For with my best conjectures I would trace
The progress of our Being) blest the Babe,
Nurs'd in his Mother's arms, the Babe who sleeps
Upon his Mother's breast, who, when his soul
Claims manifest kindred with an earthly soul,
Doth gather passion from his Mother's eye!
Such feelings pass into his torpid life
Like an awakening breeze, and hence his mind
Eyes [in the first trial of its powers]
Is prompt and watchful, eager to combine
In one appearance, all the elements
And parts of the same object, else detach'd
And loth to coalesce. Thus, day by day,
Subjected to the discipline of love,
His organs and recipient faculties
Are quicken'd, are more vigorous, his mind spreads,
Tenacious of the forms which it receives.
In one beloved presence, nay and more,
In that most apprehensive habitude
And those sensations which have been deriv'd
From this beloved Presence, there exists
A virtue which irradiates and exalts
All objects through all intercourse of sense,

No outcast he, bewild'ed and depress'd;

Along his infant veins are interfus'd

The gravitation and the filial bond

Of nature, that connect him with the world.

(嬰兒こそは恵まれた身(私は推測の限りをつくしてわれら人間の成長の跡を辿つて見よう)、母の腕にいだかれ、母の胸に眠る嬰兒こそは恵まれた身である。彼の魂は地上の魂との明らかな親近關係を主張するが、熱情を母の眼から得來するのである。彼の眠れる生命に、目覺めをうながすそよ風のやうな感情はいりこみ、彼の心は〔自分の力の最初の試みに於てすら〕活潑で、注意深く、全一の事物のあらゆる要素と部分を一個の現象に統一しようと努める——さもなれば、分離して協力を肯んじない要素と部分を、かくして愛の訓練をうけて、彼の機能と受容能力は日毎に活潑により強大になり、彼の心は拡大して、その受取る形をとらへて離さぬやうになる。愛する一個の存在、更にはその愛する存在に由來する最も敏感な心性と感覺のうちに、感覺の交流を通じて、あらゆる事物を光被し、高める効能が存する。彼は途方にくれ、心くぢけた追放者ではない。彼の幼い血管には自然の重力と親子のきつなゝが混和され、それが彼を世界に結びつけてゐるのだ。) 先づ注意されるのは、生れたばかりの嬰兒と母親との

間の本来のつながり、愛情によるつながりが先づ説かれ、この母子のつながりを通じて嬰兒と大地との本来の、本能的、情感的なつながりが説かれてゐることである。これは生れたばかりの嬰兒の状態を白紙状態と考へるロック流の行き方とはじめから異なるものがある。この点で筆者は、このくだりは明らかに嬰兒の心を *tabula rasa* として描いてゐると説くヘイヴンズ教授の見解には賛成し難い。このくだりを執筆する際にワーズワースがハートレーの心理学を全然考慮してゐなかつたことは、「熱情を母親の眼から得來る」の一句からでも推定出來るであらう。ハートレーに従へば熱情 (*passion*) は觀念聯合の法則により結合されて生れ出る單純觀念の集合体であり、生れたばかりの赤坊がいきなり母親の眼から得來るものとは考へられないからである。ワーズワースに従へば赤坊の心は白紙の状態といふよりは眠れる状態にあると云つた方が真に近い。それを活動状態に置くためには、たゞそれを目覺ませれば足りる。ワーズワースがこゝに「目覺めを促すそよ風」を持出して來たのは意味深い。ワーズワースは「序曲」を、野を越え、雲の彼方から彼を訪れる微風の叙述を以てはじめてゐる。微風は實際に詩人ワーズワースの創作活動をうながす天与の刺激剤の役割をつとめたらしい。随つて彼にとつて微風は創造的な詩的精神の訪れを意味するものであつた。ワーズワ

スがこゝで云はうとするところは、嬰兒は意識を目覚められた最初の瞬間から、すでに活潑な、創造的な活動を開始するといふことであらう。かくして彼の心は、その機能の最初の試みに於てさへ、「活潑で、注意深く、全一の事物のあらゆる要素と部分を一個の現象 (appearance) に統一しようと努める。」竹友藻風氏はこの 'appearance' を「母の眼またはその顔、赤坊の目に映ずる母を現はすもの」と解し、「そのやうな解釈の下に 'his soul...eager to combine in one appearance, all the elements And parts of the same object, else detach'd And loth to coalesce.' を「その時すでにその心は敏活に働いて一つの所現にその所現がなければ容易に一つのものとはならない要素と部分を結びつけようとする。」と解説してをられる。しかし筆者は「その所現がなければ」ではなくて、「赤坊の心以上のやうな働きがなければ」と解釈しながら「all the elements And parts of the same object」の意味が解し難いのではないかと思ふ。この場合 'the same object' とあるのは、単に赤坊の注意を惹く不特定の事物（勿論その中で最初に彼の注意を惹くものは母親であらうが）であつて、その事物が、嬰兒の心の働きによつて或る統一あるものとして彼の眼に受取られる姿が 'appearance' なのであらう。こゝでわざ／＼ 'the same' と断つてゐるのは、それによつて嬰兒の心

中に事物を 'identity' する作用の働いてゐることを意味させたのであらう。即ちこゝで、カントの云ふ感性和悟性、コウルリッヂの所謂 'understanding' が多様な感覺的素材を整理し、綜合統一して、一個の事物を認識する能力が、すでに生れたばかりの嬰兒の段階にも活潑に働いてゐることを語つてゐるのである。そのやうに能動的な、多を一に統一する動きが嬰兒の心に缺けてゐたならば、事物を構成する諸要素や諸部分はばら／＼のまゝで結合することなく、従つて統一ある一個の 'appearance' を呈せしむることができぬのである。'appearance' はこゝでは仮りに「現象」と訳して置いたが、ラテン語の *apparentia*、ギリヤ語の *phenomenon* に対応し、カントの *Erscheinung* の訳語として普通用ひられる言葉である。但し、ワッツワースがそこまで意識してこの言葉を用ひてゐるかどうかはわからない。英国の經驗主義哲学では、人間の心が外界の事物を認識する働きを論ずる場合、感覺または印象から觀念への段階を追ふのが常であつて、最初の感覺又は印象の段階では、鏡がそのまへに置かれた物体をうつすやうに、まったく受動的なものと考へ、そこに認識主観の能動的な働きを認めないのが通例である。ハートレーに至つては、單純觀念のみならず、複合觀念さへも、まったく受動的、機械的につくり出されるものと考へてゐる。もしワッツワ

ースが以上の内容を筆にするに當つて、専門の哲學者からヒントをあふぐことがあつたとすれば、それは自國の經驗主義哲學者からでなくて、やはり當時のドイツの哲學者からであつたと考へるのが穩当ではあるまいか。勿論ワッツワースがカントやシェリングの哲學書をひもといたと考へるのは突飛であらうが、こゝでワッツワースが触れてゐる程度のことであれば、ユウルリッヂにきかされた解説からでも結構間に合ふであらう。

しかしワッツワースは、生れたばかりの嬰兒の心の活動を知的な方面に限つてゐない。否、そのやうな知的活動よりも、彼の魂のうちに呼びまをせられるものは情感である。われ／＼は、先きに引用した「序曲」の一節のうち

∴ those first-born affinities that fit

Our new existence to existing things,

And in our dawn of being, constitute

The bond of union betwixt life and joy.

(われ等の生誕の曙にあつて、その新しい存在を既存の事物に結びつけ、人生と喜びの結びの糸を形づく、初産の親和性。)

とあつたのを想起する。嬰兒が此世に生れ落ちて、外界に対して先づ覚えるものはこの親和感であり、そこから生れる喜びである。そしてそれは、彼と母との生前からの結びつきにもとづき、また母親を通じて母なる大地への結びつきに由來する。しかも彼は生れ落ちると共に

母の胸にいだかれ、母の愛を満身に受けながら育つて行く。その愛は、母の眼を通じて、彼の心にちかひに伝はり来る。かくして、愛は、彼の知的活動をそのきはめて初期から強く色づける要素となる。こゝに引いた「序曲」の一節は一八〇五年稿から取つたものであるが、一八五〇年稿では、嬰兒の知的活動を叙したくんだりには削除されて、叙述の順序を少しく替へ、代りに次の一節を附加してゐる。

Is there a flower, to which he points with hand

Too weak to gather it, already love

Drawn from love's purest earthly fount for him

Hath beautified that flower; already shades

Of pity cast from inward tenderness

Do fall around him upon aught that bears

Unsignally marks of violence or harm.

(こゝに花があつて、まだそれを摘むことも出来ないやうなかわい手でそれを指す場合でも、およそ地上に於ける最も純な愛の泉から汲みとられた愛が、すでにその花を美化してゐるのだ。見るに堪へない暴力や傷害のあとを留める彼の周囲の事物に、うちなる心の優しさの投げかける憐れみが影をなげかけてゐる。)

ハートレーに従へば憐れみと云つた高等な道德觀念は人間の精神発達のきはめて遅い段階に發現するものであるが、この点に於てもワッツワースの嬰兒の心理についての考へはハートレーのそれとは極めて大きなへだたりがあると云はねばならない。

詩人は更に進んで云ふ。この母親の存在のうちには、また母親から伝へられた嬰兒の心性と感覚のうちには「あらゆる事物を光絳し、高める効能が存する」と。この言葉は難解であるが、こゝでワーズワースは嬰兒に對する母親をひそかに太陽になぞらへてゐるやうに思はれる。太陽がその恵みの熱と光によつて地上の一切のものを照らし、光輝あらしめるやうに、母親が嬰兒にそゞろ愛の光は嬰兒の見、聞く一切のものを光輝あらしめる力をもちてゐる。しかしまた一歩進んで考へれば、かく「感覚の交流を通じて」外界の一切のものを光輝あらしめる靈能は、母親の心性をそのまゝ受継いでゐる嬰兒自身のうちには存するのだ。こゝでわれは——

There was a time when meadow, grove,
and stream,

The earth, and every common sight

To me did seem

Apparalled in celestial light

(牧場も、森も流れも、大地と一切の世のつねの眺めが、私には天上の光をまといつて見えたときがあつた。)とあるのを想ひ起す。兩者共に、幼児の頃は、目に映する地上一切のものが一種の光輝を帯びて見えたところゝ点では一致する。只、一方ではその光輝のよつて来る所以を母親の存在に歸し、他方ではそれを、幼児がまた神

の御許を離れて間がないことに歸してゐる。

...trailing clouds of glory do we come

From God, who is our home.

この喩の端ひの点にうつては「永生の賦」自体を主題として、他日また論じる機会を持たせたい。

ワーズワースは更に進んで、自然と嬰兒との間の相関々係に言及する。

Emphatically such a Being lives,

An inmate of this *active* universe;

From nature largely he receives; nor so

Is satisfied, but largely gives again,

For feeling has to him imparted strength,

And powerful in all sentiments of grief,

Of exultation, fear, and joy, his mind,

Even as an agent of the one great mind,

Creates, creator and receiver both,

Working but in alliance with the works

Which it beholds.—Such, verily, is the first

Poetic spirit of our human life;

By uniform control of after years

In most abated or suppress'd, in some,

Through every change of growth or of decay,

Pre-eminent till death.

(明らかに、この活動的な宇宙の同宿者として、このやうな存在は生きつゞける。彼は自然から多くを受取るが、それだけでは満足しないで、多くを与へかへすのである。といふのは、感情は彼に力を与へ、悲哀と、歎息と、恐怖と、喜びのあらゆる情緒を強く感じながら、偉大なる心の代理者として、創造者であると共に受容者として、創造するのだ。但しそれは、己れの見る被造物と協力して働くのであるが。——かゝるものこそ正にわれ等の人間生活の最初の詩的精神である。この精神は年を経ると劃一的な統制をうけて、大抵の人間の場合に減退し、抑圧されてしまふが、ある人間にあつては、成長と老衰のあらゆる変化を通じて、死に至るまで自覚ましい活動をつゞける。)

ワーズワースはこゝで人間の心が「偉大なる心」の代理者であるといふ考へを語つてゐる。これについてはコウルリッチが「文学的自叙伝」の第十三章で「第一次的理想像力」の働きを説明して

'the living power and prime agent of all human perception,a repetition in the finite mind of the eternal act of creation in the infinite I AM;' とのへてゐるのを想ひ起さねば。こゝにコウルリッチの所謂 'the infinite I AM' は神、又は自然のうごむに働く創造精神をわが心の中に考へられる。われは二者の

考へが似よつてゐる点からして、ワーズワースはコウルリッチを通じて、シェリングあたりの思想を採入れてゐるのでないかといふ疑ひをいだかせられる。

しかし、ワーズワースのこのやうな考への源と思はれるものが、実は「序曲」の中に述べられてゐる彼自身の経験の中に見出される。彼は「序曲」の最終巻の冒頭で、青年時にウエイルズのスノウドン山に登つたときの自然の印象を語つてゐる。彼は月明の夜、この山上から広大な雲海と、それを抜いてそびえる周囲の山々を眺め、それら全体に月の光がくまなく照り渡つて、この世ならぬ光景に変へてしまつてゐる有様に、深い感銘を覚えるのであるが、その夜山上に留まつてゐる間に、次のやうな冥想が彼の心のうちに湧き上つて来る——

A meditation rose in me that night

Upon the lonely Mountain when the scene
Had pass'd away, and it appear'd to me

The perfect image of a mighty Mind,

Of one that feeds upon infinity,

That is exalted by an underpresence,

The sense of God, or whatsoever is dim

Or vast in its own being, above all

One function of such mind had Nature there

Exhibited by putting forth, and that

With circumstance most awful and sublime,
That domination which she oftentimes
Exerts upon the outward face of things,
So moulds them, and endues, abstracts, combines,
Or by abrupt and unhabitual influence
Doth make one object so impress itself
Upon all others, and pervade them so
That even the grossest minds must see and hear
And cannot chuse but feel. The Power which these
Acknowledge when thus moved, which Nature thus
Thrusts forth upon the senses, is the express
Resemblance, in the fulness of its strength
Made visible, a genuine Counterpart
And Brother of the glorious faculty
Which higher minds bear with them as their own.
That is the very spirit in which they deal
With all the objects of the universe;
They from their native selves can send abroad
Like transformations, for themselves create
A like existence, and, whenever it is
Created for them, catch it by an instinct;
Them the enduring and transient both
Serve to exalt; they build up greatest things

From least suggestions, ever on the watch,
Willing to work and to be wrought upon,
They need not extraordinary calls
To rouse them, in a world of life they live,
By sensible impressions not enthralld,
But quicken'd, rous'd, and made thereby more apt
To hold communion with the invisible world.
Such minds are truly from the Deity,
For they are Powers; and hence the highest bliss
That can be known is theirs, the consciousness
Of whom they are habitually infused
Through every image, and through every thought,
And all impressions.

(その光景が過ぎ去つた後、その夜寂しい山の上、ある冥想が私のうちに湧き上つて来た。その光景は私には無限に思ひをこらす壮大な心のちながらの姿のやうに思つたのである。その心はある意識下の存在、神への知覚、あるひはおおよそそれ自体の存在が茫漠として広大なものへの知覚によつて高められてゐるのだ。何よりもまづ、自然はきはめて畏怖と崇高さに充ちた環境にあつて、しばしば事物の外面に及ぼす、あの支配力を現はすことによつて、かういふ心の持つ一つの機能を示したのである。即ち、このやうにして自然は事

物の外面を形づくり、それに附加し、抽象し、結合し、あるひは突如異常の影響力を及ぼしてある一つの事物を他のあらゆる事物に印刻し、それらすべてに滲透させて、そのため、どれ程複雑な心の持主でもそれを見、聞き、感じないわけに行かなくなるのである。これらの心の持主でも、感動した場合に認めるこの力、自然がかくして五官に及ぼす力は、その力を充分にあらはした場合は、高邁な心が己れのうちに持つ輝かしい能力に明らかに似よる力を持ち、かゝる能力と全く双生児的關係にあるのだ。これこそ高邁な心が宇宙の万物を扱ふ眞の精神だ。それは本来の自己から、(自然の麥容力に)似た麥容力を發生し、自分で(自然の作り出す存在と)似た存在をつくり出し、また他によつて自己のためにかゝる存在がつくり出されたときは、本能的にそれを感知するのである。恒久的なものも、つかの間のものも、この心を高めるに役立つ。このやうな心は常に注意深く、働きかけ、また働きかけられることに敏であつて、ほんのわづかなヒントからでも偉大な事物をつくり上げる。その住む世界では、かういふ心を目覚めさせるためには、格別の呼びかけを必要としない。かゝる心には感覺的印象に束縛されることなく、それによつて活気づけられ、呼びさまされて、不可見の世界と交通することにかへつて都合よくされる

のである。このやうな心は眞に神に由来するのである。このやうな心こそ神の使者であるから。だから知られ得る最高の至福感(彼等の)ものであつて、その至福の意識を彼等はあらゆる心象、あらゆる思想、あらゆる印象を通じて、不斷常住に吹きこまれるのである。) ところで 'a mighty mind' とあるのは、第二卷の先きに引用したくたりに 'the one great mind' とあるのに似よつた言葉遣ひであるが、前者は自然の暗示する「高邁な人間の心」であるのに対して、後者は人間の心がその雛型をなすところの、自然のうちに働く創造精神なのである。しかしこの似よりは当然のことであつて、ワーズワースに述べ、人間の中に働くものも、また自然のうちに働くものも、所詮は同じ神的な創造力なのである。尚この点については、「無限に思ひをこらす壮大な心」がセリンコートの指摘してゐるやうにミルトンの「失業園」中の一句

Thou from the first

Was present, and, with mighty wings outspread,

Dove-like sat'st brooding on the vast abyss.

(御身は太初よりいまして、
壮大なる翼をひろげ、鳩の如くに無辺の深淵に巢ごもりつゝ坐したまひぬ。)

の余響であることを思ひあはせてよからう。ここでミルトンが「御身」と云つてゐるのは精霊 Holy Ghost の

あつて、しかもそれはこゝでは神来の詩的靈感と全一視されてゐるのである。

「序曲」からの先きの二個の引用章句に共通するものは、人間も自然もひとしく受動的、受容的方面と、能動的、創造的な両面をそなへてゐるといふことである。そしてこの両者は、互ひに独立の存在でありながら、同一の法則の下に相互に影響を及ぼし合ふといふ關係に立つてゐる。人間と自然との間のこの双生児的關係を認める点が、ワーズワースの思想の特色をなすものゝやうに思はれる。スノウドン山上の経験を扱つたくだりでは、この創造的な働きを特に高邁な心の持主——詩的創造力に富む人——に認めてゐるのであるが、嬰兒の心理を扱つたくだりでは、この能力をあらゆる人間の幼時に推し及ぼし、世に詩人と云はれる人は、要するに幼児の時代に何人も持つてゐた力を、青年になつても、老境に入つても衰へさせることなく、そのまゝ維持しつゞける人に外ならなると語つてゐるのである。このやうに、幼児の心に高度の創造力を認める点、またこの力を知覚の能力と質的には異らないと考へる点は英国経験主義の伝統とは異質のものとも云ふべきであらう。

さて、こゝに引用した嬰兒の心の發達を描いた箇所は、アーネスト・ド・セリンコートの所謂V稿本のうちに見出される。ところがV稿本は現存する目ばしい「序曲」の

草稿中最古のものであることがセリンコートによつて確かめられた。それは一七九九—一八〇〇に書かれたか、あるひはそれよりも古いかも知れぬとされてゐる。¹⁸⁾ ハ

ーバト・リードはアーサー・ビーティの説を受け入れて、ワーズワースがハートレーから受けた影響は「深遠である」と考へ、「序曲」の最初の稿が完成された一八〇五年まで、ワーズワースの思想の背景をなすものはハートレーであり、少くとも一八〇二年までは、ワーズワースはハートレーの心理学によつて人間心理の全体を説明し得るものと考へてゐたと主張してゐる。¹⁹⁾ しかし問題の箇所がかくも早い時期に「序曲」の一部として執筆されてゐるといふ事実だけでも、ハーバト・リードの以上の主張をくつがへすに充分であらう。筆者はハーバト・リードが実際にハートレーの心理学とワーズワースの思想との關聯をしらべたことがあるかどうかを疑ふものである。ワーズワースがある程度ハートレーを含む当時の心理学説を知つてゐたことは、用語その他の点から推察されることであるが、彼の書きものゝ中で、これこそ確かにハートレーの説にもとづくものだと言つて来るのは殆んど見当らない。これまで明瞭にハートレーの觀念聯合説だと考へられてゐたものさへ、詳しく検討すれば決して「純粹のハートレー流の心理学」でなかつたことは先きに見た通りである。

以上に検討して来たところに關聯して、ワーヅワースの想像力説の持つ一つの特色と云つたものが考へられる。コウルリッヂは「文学的自叙伝」の中でワーヅワースの詩のもつ特徴として、「深い感情と深遠な思想との合体、事物を觀察する真実さと、觀察される事物を變容させる想像的能力との間の見事な均衡、そして特に、通常人の眼には、習慣のためあらゆる輝きが曇り、そのきらめく露の玉が干上つてしまつてゐるやうな形象、事件、境遇のまはりに調子、^{トーン}雰囲気と共に理想世界の深みと高さを瀟漫させる独自の天分」を挙げてゐる。また彼はワーヅワースとの間に「詩の二つの重要点、即ち、自然の真実に忠実に従ふことによつて読者の同情をよびおこす力と、想像力の變容的色彩によつて新奇の魅力を与へる力と」がよく話題にのぼつたこと、また「偶然の光と影、月光や夕陽が既知の見馴れた光景に行き渡らせるところの俄かの魅力がこの兩者を結合する可能性を示してゐるやうに思はれること」がよく話題に上つたと云つてゐる。こゝに月光が持出されてゐることは興味深い。コウルリッヂとの對談中、ワーヅワースの胸中には、先年のスノウドン山上のあの壯嚴な月下の光景か当然浮び上つたことであらう。そしてその時の經驗が兩人の議論をすゝめ、ワーヅワース自身の思索を深める上に貴重な導きの光となつたことが当然に考へ得られる。

さてコウルリッヂはこゝで忠実な觀察の力と、それに想像的な彩色をほどこす力とを一応分つて考へてゐるが（ワーヅワース自身も一八一五年詩集の序文では兩者を分つて考へてゐる）ワーヅワースの考へる「想像力」は云はゞこの二者が一つになつたものと考へてよからう。ワーヅワースにあつては想像力は觀察する事物自体のもつ性質と獨立して働くものではない。「その見る被造物と協力して働き」「受入れると共に創造する」この兩様の働きを同時に行ふところにワーヅワースの想像力は生れる。それは眺める事物の提示する多様性を受入れつゝ、しかもそれを「ある一つの調子に統一する力」「ある事物を他のあらゆる事物に印刻し、そのすべてに滲透する力」なのである。それはまた、感覺的印象を受入れながら、しかもそれにとらはれず、「不可見の世界」と交通する力であるが、彼によればその不可見の世界こそは「ものゝ生命」なのである。このやうな、「序曲」最終巻に見られる考へは、恐らくはワーヅワースの言明してゐるやうにスノウドン山上で、その完全な姿を取つたものではなく、後年に仕上げられたものであらうが、そのやうな考への萌芽を秘めた強烈な體驗を、ワーヅワースがおそくも一七九三年には得てゐるといふことは、ワーヅワースの思想をハートレー、あるひはシェリングの思想にもとづくものといふ風に簡単に片付けることの出来ないことを語

るものではあるまいか。ワーズワースの思想にはそのよ
つて来る深い、なまの体験がその奥にたゞへられてゐる
のであつて、彼はその体験の解釈に役立つ限りに於て他
人の考へをそれも自由に更改して適用してゐるのだとい
ふことをこゝでもあらためて痛感させられる。そして、こ
の想像力の本質とも云ふべきものを単なる抽象的な思索
によらず、上記のやうな感銘的な感覚的神祕的体験から
導き出してゐるところにワーズワースの思想形成の特色
が見られる。かくしてワーズワースにあつては、想像力は

...but another name for absolute strength

And clearest insight, amplitude of mind,

And reason in her most exalted mood.

(絶対的な力と、最も明析な洞察力、心のゆたかきの別
名であり、理性がその最も昂められた境地にあるもの。)
に外ならない。このやうに想像力を一種の洞察力であ
ると見る考へは、英国経験主義哲学の伝統とどういふ関
係に立つであらうか。

フランシス・ベイコンは想像力を評して、「自然の規格
をふみはずし、自然の中では決して一緒にならないもの
をくつつけ、自然の中では決して起らないことを起ら
せ」⁽²¹⁾ また「勝手気儘に事物の不合法の婚姻と離婚をつ
くり上げる」⁽²²⁾と云つてゐる。想像力についてのこのや

うな見方は英国経験主義哲学者の間にも受け継がれた。
ジョン・ロックは想像力にあたるものをウィットとして
考へ、「多量のウィットを持ち、敏活の記憶力を持つ人が
常に明瞭な判断力又は深遠な推理力を持つ人とは限らな
い」⁽²³⁾と云つてゐる。デイヴィッド・ヒュームも「人間の
想像力はもと／＼崇高で、何であれ、遠いもの、異常な
ものを喜び、自由奔放に時空でもつとも遠隔の部分に走
つて、習慣のためあまりにも見馴れた事物を避けよう
とする。正確な判断はそれとは正反対の方法をとる」⁽²⁴⁾
と論じて、想像力に正確な判断の機能を認めてゐない。

想像力が人の心を楽しませます働きについては、デョウゼ
フ・アディソンが「スペクテイター」誌上に何号かに互
つて論じてゐるが、これもそれを形成的な働きとして、
あるひはものゝ真を把握する働きとしては殆んど説くこ
ろがない。ワーズワースの想像力説にアディソンの直
接又は間接の影響を認める論者もあるが、その影響はさ
して重大なものとは考へられない。

アーサー・ビーティーは、ワーズワースが想像力を理
性あるひは真理と同一視してゐる事実をあげて、「このや
うに全一と考へたのは、彼(ワーズワース)が想像力を
観念聯合説、特にハートレーの体系によつて説明した結
果であつて、従つてわれわれは彼の説をコウリッヂの

想像力説や他の先驗主義哲学に關係づけて説明することは出来ない。」と云つてゐる。しかし、ピーティの云ふやうな「想像力を觀念聯合説によつて説明した」くだりは、ワーズワースの書きものゝいづこにも發見されず（ピーティ自身は「人間三時期説」に關係づけて、ワーズワースの心に於ける「空想」の支配から「想像力」の支配への發展を説いてゐるが、こじつけの感を免れない）、況んやハートレー自身の著書の中に想像力と真理把握の力とを全一視するやうな議論は全然見受けられない。ハートレーはアディスンと同様に、空想と想像との間に何の差違をも認めず、「特に視覚的又は聴覚的な觀念が活々と、しかし過去の事實に認められた秩序に無關係に再現するものは、想像力又は空想力に帰因する。」と述べてゐるのである。彼の「人間觀察論」の所々に想像力の語は出て来るが、その働きの性質については殆んど説くところがない。

かく見來るとき、ワーズワースに見られる想像力説、ことに想像力を真理把握の最高形態と見る見解を、英國經驗主義の哲学の伝統に結びつけるのは不可能のやうに思はれる。ところが、想像力の説はワーズワースの人生觀と詩觀を形づくる中核的な要素である。しかもその説は、彼のうちに深く根ざしてゐるところの、人間の心の

働きを創造的、構成的、有機的なものと考へようとする傾向から來てゐる。そしてその傾向自体が、大きく見れば、全ヨーロッパにきざしの見えてゐた新しい思潮の反映なのである。この点、ワーズワースは根本的には當時のドイツの先驗主義哲学と同じ方向に向つてゐたと云へるであらう。しかしそれは、彼がドイツ哲学の追隨者であつたといふことではない。若きワーズワースは「常に注意深く、他に働きかけ、また働きかけられるに敏で、ほんのわずかなヒントからでも偉大な事物をつくり上げる」ことが出來たが、彼は彼自らの深い体験のうちに、それから彼独自の人生觀を引き出すに充分なものを持つてゐたのである。(終り)

註

- (1) 「序曲」からの引用章句は、特に断らない限り、すべて一八〇五年稿からのものと了解された。
- (2) アーサー・ビーティは *the extrinsic nature of feeling* といふ言葉を用ひてゐるが、彼はこの場合 *'extrinsic' を 'factitious'* の意味に用ひてゐるのである。このことについては後で觸れる。
- (3) Arthur Beatty: *William Wordsworth—His Doctrine and Art in their Historical Relations*, 1922, p. 105
- (4) Raymond Dexter Havens: *The Mind of a Poet*, Vol.

II, p. 306

- ⑤ David Hartley: Observations on Man, 1749, 1st Part, Chap. IV, Sect. I, pp. 418—420
- ⑥ Arthur Beatty: W. Wordsworth, p. 104
- ⑦ Audrey de Vere: Essays Chiefly on Poetry, Vol. 2, 1887, p. 277.
- ⑧ David Hartley: Observations on Man, 2nd Part, Chap III, Sect. II, p. 213.
- ⑨ Arthur Beatty: W. Wordsworth p. 114—115
- ⑩ Basil Willey: The Eighteenth Century Background, 1950, p. 146.
- ⑪ David Hartley: Observations on Man, 1st Part, Chap. III, Sect. III, pp. 368—369.
- ⑫ Arthur Beatty: W. Wordsworth, p. 101.
- ⑬ *ibid.*, p. 104.
- ⑭ Hartley: Observations on Man, 1749, 1st Part, Chap. III, Sect. III, p. 370. 是の題は、Observations on Man の紙木版 (London: Printed for Thomas Tegg and Son, 1834) の訂正増補版に於て、たゞ「never alter」の語を「never alter」に改められたるを以て、
⑮ Raymond D. Havens: The Mind of a Poet, Vol. II, p. 322.
- ⑯ cf The Prelude ed. by Ernest de Selincourt, 1928, notes p. 500.
- ⑰ 竹友藻風編 The Prelude Vol. I. (研究社) p. 53.
- ⑱ Wordsworth: The Prelude ed. by E. de Selincourt, 1928, Introduction, xxii.
- ⑲ Herbert Read: The True Voice of Feeling, 1953, pp. 201—202.
- ⑳ Francis Bacon: Advancement of Learning, Bk II, Chap. I.
- ㉑ *ibid.*, Bk II, Chap. XIII.
- ㉒ John Locke: An Essay Concerning Human Understanding, Bk II, Chap. XI, Sect. 2.
- ㉓ David Hume: An Enquiry Concerning Human Understanding, Section XII, Part III.
- ㉔ E.F. Carritt: Addison, Kant, and Wordsworth (Essays and Studies by Members of English Association, Vol. XXII, 1937.)
- ㉕ Arthur Beatty: W. Wordsworth p. 158.
- ㉖ *ibid.* pp. 153—157.
- ㉗ David Hartley: Observations on Man, 1st Part, Chap. III, Sect. V, p. 383.
- ㉘ しかるに、この「ワーズワースが十八世紀英國思想の一般的风潮から影響を受けなかつた」といふことは、ワーズワースがたとへば英國十八世紀の楽観主義を如何に受継ぎ、それが彼の思想をどのやうに限界づけしめるかは、興味ある問題であらう。しかるに、この「ワーズワースが更なる検討の機会をもちた」といふことは、